

あらたまの年たちかへりぬれば、雲の上もはれくしうみえて、そらをあふがれ、夜のほどにたちかへりたる春のかすみも、むらさきにうすくこくたなびき、日のけしきうら、かに、ひかりさやけくみえも、ちどりもさえつりまさり、よろづみな心あるさまに見え、枝もなかりつる花も、いつしかとひもをとき、かきねの草もあをみわたり、あしたのはらも、をぎのやけばらかきはらひ、かすがの、とぶひの野もりも、よろづよの春のはじめのわかなをつみ、こほりとく風も、ゆるく吹てえだをならさず、谷のうぐひすも、行すゑはるかなるこゑにきこえてみ、とまり、ふなをかのねの日の松も、いつしかと君にひかれて、萬代をへんと思て、ときはかきはのみどりの色ふかくみえ、もたひのほとりのちくえふも、すゑのよはるかにみえ、はしのもとのさうびも、なつをまちがほになどして、さま／＼めでたきに、てうはいよりはじめてよろづにをかしきに、宮の御かたの女房のなりども、つねだにあるに、まいても、あざやかにかほりふかきもことわりとみえたり、

〔ひともと草〕江戸の元日

圓正恭

年たちかへる空は、いづこもめづらかなるものから、わきてあづまの江戸の賑はしさ、いへば今さらにくだ／＼しけれど、おもひつゞくれば、さまことにや、霞ヶ關の北にかまへられたるみとのみくるわの石垣、たかうそびえたるうへに、生つらなれる松どもの色やう／＼、まらみゆくほど、ねぐらの鳥打はぶきたるにあはせて、櫓にかけたるつゝみ、明ぼの告げ渡るこゑうち出たるは、漁陽の三槌もさばかりにやと、いみじう聞ゆるまに、みかど／＼引あくるより、とのもりの人竹ひきならしけいめいし、さわぐもいはんかたなし、三家、三卿のきんだちを始めまるらせ、みくにうどの國の守、又はけいしのかさくらゐ、むねと時めける人々、つぎ／＼下づかさにて、たるまで、あけ紫の色々、其の品に、またがへる直衣、えぼうし上下など、とり／＼さうぞきたて、